

明治期の富山における西洋音楽の受容

—文献調査による唱歌教育を中心とした歴史の再構築—

谷口 昭弘・森田 信一

European Music in the Meiji Era of Toyama, Japan
— A History through Documents —

Akihiro TANIGUCHI and Shinichi MORITA

E-mail : moritas@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：明治, 音楽, 唱歌, 軍楽, 教育, 富山, 師範学校

keywords : Meiji-Era, Music, Shoka (School songs), Band music, Education, Toyama, Teachers' school

I. はじめに

本論文は、明治時代、どのように西洋音楽が富山県に持ち込まれたか、あるいはそれにもとづいて、富山県内で、その音楽がどのように人々の間に広まっていったのかについて調査したものである。調査に使用したのは、主に富山県立図書館が所蔵する明治期の学校教育関係の諸資料、新聞各種記事、さらには昭和に入ってから富山県内の文化人によって発行された雑誌『スバル』に連載された「富山芸術文化史」等である。その際、富山県師範学校で行なわれた唱歌教育、師範学校教師や地域の学校教師によると思われる唱歌演習・教育、そして、その他の音楽活動といった3つの側面に着目した。

これまで、富山県における西洋音楽の受容の歴史は、そのほとんどが、この地における音楽教師や演奏家による回顧という形で書かれている^(注1)。また、そういった回顧が文章として残されているのは、時代的に大正中期以降に限られている。従って、明治時代の音楽活動についての文献による包括的な調査は、未だ充分になされていない。

もちろん今回の調査に使用したような、富山県内で発行された雑誌記事・新聞記事が、必ずしも音楽の知識に長けている執筆者によるとは限らず、そのための限界はあるだろう。しかし、富山以外の地域について書かれた明治の音楽・音楽教育の概説・研究書を参照したり、県内資料においても複数の情報源を参照することによって、できるだけ正確を期す

ることは可能であろう。以下は、その試みの一つである。

II. 唱歌教育

東京音楽学校の前身で明治12(1879)年に創設された音楽取調掛は、日本における西洋音楽の受容ならびに普及の拠点となり、音楽家だけでなく、日本の各地方で行なわれた唱歌教育を担う教師をも育成した。そして富山への西洋音楽の導入を果たしたのは、富山県師範学校である。富山県が現在の形になったのが明治16(1883)年であり、それまで県庁所在地や、県そのものが中央政府の判断や地元住民の運動によって、廃藩置県後も大きく混乱し、それに伴う形で富山県師範学校の組織も改編されている。

そのような中で明治16(1883)年7月、石川県から分かれて独立した富山県では、師範学校も富山県男子師範学校ならびに富山県女子師範学校となって新たな一歩を踏み出すことになる^(注2)。さらに17(1884)年4月、男女2校が合併する形で、富山県師範学校となった^(注3)。時期を同じく、明治16年には富山県中学校開校が布達され、中学校規則も制定された。中学校規則の第5章は教則となっていて、その中の第14条では、教科について「初等中学科は修身和漢文英語算術代数幾何地理歴史動植物物理化学経済簿記習字図画及唱歌体育」としながら、「但唱歌は当分之れを欠く」と記されている^(注4)。この「唱歌は当分之れを欠く」は、翌17(1884)年

の富山県小学教則についても同様の扱いを受けており、これは音楽取調掛が行なった扱いと同じであり、教師不足など現実的な問題のため、実際に指導が行なわれる環境が整っていないことを示している^(注5)。

とはいえ、唱歌教育についての準備は始まっていた。明治17(1884)年2月19日には富山県師範学校から唱歌教師の養成について「今回師範学校二等教諭野中武雄音楽為伝習上京為致候間可然御取計相成度」という依頼が音楽取調掛宛に提出されている^(注6)。この野中武雄こそは、富山における最初の西洋音楽の教師となる人物であり明治時代の国学者で教育者だった。嘉永元(1848)年5月6日、越中国・中野町生まれ^(注7)。明治3(1870)年、平田延胤の門に入り国学を学び、神道を極めようと石川県神道中教院と愛知県神道中教院に学んだ。さらに雅楽師山井影順と林広継に雅楽を学び、石川県気多神社、愛知県熱田神宮で神職を務めた後、現在の富山県が誕生する前の明治15(1882)年6月、石川県富山女子師範学校および男子師範学校の教官となる。野中は音楽取調掛(東京音楽学校の前身)に伝習生として学び、明治18(1885)年7月20日、「修業証付伝習生」として卒業している。また式部職、雅楽稽古所等でも学び、音楽家として知られていた。彼は明治4(1871)年、富山藩宣教掛を命じられたというが、別の資料では、富山県師範学校のルーツとなる新川県講習所(明治6[1873]年創立)に創設当時から教員としてかかわり、8年に一度退職している。その後、能登国気多神社や尾張国熱田神社で神職を務めた後、明治13(1880)年に助教として師範学校に再赴任。明治22年5月、奈良県師範学校に転任するまで教鞭を執っていた。

富山県内の学校における唱歌教育の開始時期をここまでの資料で特定することは難しい。とはいえ、野中武雄が音楽取調掛における伝習を終え、富山県師範学校で教鞭を執った時点の一つの可能性として捉えることは可能であり、そうであるならば、明治18(1882)年の後半、7月以降と考えるのが妥当だろう。

III. 西洋音楽に対する関心の高まり

唱歌教育が、富山県師範学校から始められようとするのと同時期に、地元の『中越新聞』は、西洋音楽を紹介する記事を掲載しており、西洋音楽に対す

る関心の高まりを示している。例えば明治18(1885)年10月20日の「東京通信」には「音楽取調所」にて「洋琴特別習学」が行われたことが記されている。当時は洋琴、つまりピアノも珍しく、楽器そのものを紹介する必要があった。当該の『中越新聞』の記事を引用する。

該洋琴の芸術は欧州においてはもっとも広く世に
もれし楽器にして中等以上の家財を有する人々の
婦女子にてこの芸を知らざるものは恥辱となし婦
女子修学の課定中(ママ)欠くべからざるものと
なし居ると。されば日本のおいても数年前音楽取
調所の設けありてより右洋琴を米国より取寄せ所
蔵しありたれども常時世人未だ音楽の必要を知ら
ざりしゆえ、今日までも楽器は凶餅に属し居たも
現今はよほどその必要を感じ音楽を修むるもの
多きより同所において洋琴の特別習学の規定を設
けすでに洋楽修学室も落成しこれほど志願人を募
集…^(注8)

急速に高まった西洋音楽受容の気運について、『中越新聞』はさらに「金沢通信」として唱歌演習会の様子を伝えている。金沢市の博物館で行なわれたこの演習会は石川県師範学校の女生徒および各小学校教員が集まっただけではなく、付属小学校男子生徒、地域住民もいた。そして歌われたのは、音楽取調掛編『小学唱歌集』所収の唱歌だった^(注9)。

IV. 富山県内初の音楽会

富山県内における音楽活動がどのようなものであったかについては『富山県学事通報』が、師範学校で行なわれていた「音楽会」について伝えている。それによると明治19(1886)年11月に、富山県における初めての音楽会が師範学校の講堂で行なわれ、明治20年2月以降は「毎月第2日曜を定日と定め」、すなわち定期的に行なわれることになった(それ以前も月一度は開催していたが、日程は定まっていなかった)。この演奏会は一般にも公開され、開始以来「参聴人」は「創設以来漸時増加し二三百人に及んだ」というから、かなりの盛況ぶりだったことがうかがえる^(注10)。

さらに『学事通報』には「音楽会規則」なるものも記されており、これを読むと、師範学校主催によ

る音楽会の趣旨が垣間みられる。

第一 本会は毎月一回本校及び附属小学校の生徒をして平素授けし所の唱歌等を演奏せしめ益熟達せしむる以て趣旨とし傍らを広く世人に雅正の音楽心を感じせしめんことを要するものなり

第二 音楽は和漢洋古今各種異同あるを以て参考かつ参聴人の余興に供せんが為斬次演奏す。その種類左のごとし

唱歌 保育唱歌 神楽 催馬楽 雅楽 高麗楽 朗詠 東遊 筑紫琴歌^(注11)

このうち規則の第一を見ると、この音楽会が、日頃師範学校で行なわれている教員養成の活動だけでなく、その教員による指導の成果を発表し、県民の音楽文化を啓蒙しようとする意図が感じられる。一方で、のちの資料には、この師範学校の音楽会が「生徒の唱歌練習やその発表、西洋音楽の鑑賞などを行ない地方音楽趣味の向上をはかった」^(注12)とあるが、音楽会規則の第二を見ると、実際に演奏されていた音楽は西洋のものに限らず、その実情から「和・漢・洋の区別が混然としており、学校音楽の方向が定まっていなかった」^(注13)という分析の方が、より正確に当時の実情を表しているのかもしれない。ただ音楽ジャンルの混在は、この音楽会の実現にこぎ着けた背景にある野中武雄の意図的なものであったことも否定できない。彼は雅楽を学ぶ一方で、伝習生として西洋音楽を音楽取調掛で習得しているからである。

V. 学理講習会における唱歌

明治20(1887)年には師範学校の教頭中川効次郎(明治19年、教諭心得として赴任)^(注14)の提唱によって師範学校教員が参加する形の「学理研究会」が組織され、各教員が担当教科の研究発表を、毎月第2日曜、師範学校の講堂にて公開で行った^(注15)。当時の『中越新聞』には、この組織によるとおもわれる「学理講習会」が記録されており、3月13日の会では、午前中に様々な講演会が行われた後、午後1時より「音楽演習会」が開催された。この演習会も、前年11月から行われている「音楽会」の内容を彷彿とさせるように、様々なスタイルの音楽が混在している。『中越新聞』に掲載された曲目は、次の通

りである。

管弦(太食調合歎宴)、保育唱歌(やすきためし)、唱歌(見渡せば)、同(薫りに知ラルル)、箏(心盡[心尽くし])、唱歌(霞める空)、箏(老さい)、同(八段)、保育唱歌(ふりぬるふみ)、管弦(抜頭)^(注16)

このうち《見わたせば》や《薫りに知らるる》、《かすめる空》は『小学唱歌集』から取られており、金沢の講習会にも見られたような、音楽取調掛の影響が見て取れる。その一方で雅楽や箏曲も含まれており、明治19(1886)年以来の「音楽会」の趣旨に沿ったものとも考えられる。

VI. 専修科の募集

明治20(1887)年の『学事通報』によると、富山県師範学校は、唱歌と裁縫の専修科の学生を募集することになる。7月5日、県知事国重正文による告示によると、唱歌裁縫専修科は「女子にして唱歌裁縫両科の小学校教員たらんと欲する者を養成する」ためのものであり、学科は四級に分けられ、「毎級修学の年限は6ヶ月とし満2ヶ年」で完了するとされている。ただし「品行端正学業熟達のもの是指定の年限に拘わらず抜擢することあるべし」とも書かれている^(注17)。学生数は基本として30名。年齢は15歳以上25歳以下で「強健にして在学中家事に^{けるい}係累なき者」という条件が付けられている。入学試験は「音声を発せしむ」として、実技が科せられることが明らかになっており、カリキュラムも、第4級から第1級まで、級が上がると、単音唱歌から複音唱歌へとレベルアップしていく^(注18)。

VII. 唱歌講習会

明治時代、急速に教育制度が整えられる中で、唱歌を学ぶ必要性は学校現場からも感じられるようになった。その過程で、師範学校の外に唱歌を学ぶ会が作られるようになった。例えば東京音楽学校を卒業後アメリカに留学し、明治23(1890)年、富山県師範学校に赴任した深澤登代吉は富山県各地に唱歌講習会を開いた^(注19)。深澤は師範学校で教鞭を執る以外に、これらの講習会で、休暇を惜しんで唱歌の

普及にあたったという^(注20)。彼が作った唱歌を学ぶ会には、まず、自らが会長を勤める富山市唱歌研究会というのがある。会員は40人余り。その他の組織を列挙してみると、まずは射水郡小杉町唱歌会。23人の会員で幹事は小寺孝経。射水郡大門町唱歌講習会は27人の会員で幹事は篠田清八郎。高岡市唱歌会は41人の会員で会長は常見甫(はじめ)。砺波郡福野第四唱歌会は33人の会員で幹事は石黒緑。砺波郡出町唱歌講習会は40人の会員で理事は島英子であった。^(注21)

別の資料を探ると、これらの会の動きが、より具体的に分かってくる。例えば富山市唱歌会は桃井町を所在地とし、月次唱歌会を開催していた^(注22)。つまり、唱歌を定期的に学ぶ会であったということである。さらに同年11月20日の記事によると、上新川郡西加積教育会が主導する形で、毎月第2・第4土曜日に唱歌の講習会が国語の講習会とともに行なわれていた。場所は滑川開達小学校で、深澤と、富山尋常中学校の平井頼吉が講師を務めた^(注23)。また射水郡小杉町小杉小学校と高岡市育英小学校にても唱歌講習会が催されていたが、この時の担当は深澤ではなく、それぞれの地方の唱歌会員が講習を催したと報じられている^(注24)。さらに滑川地方教育会において7月25日から2週間に渡り、鷹野国蔵を講師に迎え「学理」と唱歌の二教科を講習したという記録もある。参加したのは30人余りで、記念撮影と慰労会も行なわれている^(注25)。

そのほか『音楽雑誌』に言及されなかった唱歌講習会も存在しており、上新川郡五百石町松本小学校では、明治26(1893)年7月創立以来、唱歌の「研究を重ね」、28(1895)年1月、松瀬楼にて行われた唱歌講習会の新年総会では、ヴァイオリン5・6挺が備えられていたと記録されている^(注26)。なお明治28(1895)年7月5日、上市小学校にて行なわれた唱歌講習会でもヴァイオリンの講習が行なわれており、高価なオルガンではなく、値段も持ち運びも手軽なヴァイオリンが唱歌指導のための楽器として使われていたことが、明らかになっている。これは富山に特殊なことではなく、全国的な流れだった^(注27)。

とはいえ、オルガンも明治29(1896)年には教育現場にも出現していた。富山市総曲輪小学校区の有志、永井平助ほか138人が「同校備品」として「風琴一台と付属品」を寄付したというもので、その代

価は、当時の金額で84円だった^(注28)。同じ年の9月30日には富山市五番町小学校に、やはり校区の「有志」がオルガンを寄贈したので、披露会が催されているし^(注29)、翌30(1897)年6月20日には、富山市山王町小学校でも、やはり「風琴披露会」が行われている^(注30)。

VIII. 教員検定試験

当時、小学校における音楽の教師になろうとする者がどの程度唱歌(音楽)を理解し、どの程度歌と器楽の演奏技術をもち、また、どのように唱歌を教授したかを今日、限られた資料のなかで明らかにすることは、非常に困難なことである。しかし、このような唱歌教員の実態を垣間みる資料の1つとして、当時行われていた教員検定試験における唱歌の問題が挙げられる。明治25(1892)年7月21日発行の『私立富山県教育会雑誌』掲載の内容は、以下のとおりである。

音楽

理論

音階には幾許の全音半音ありや又如何に組織せらるるや

譜表とは如何なるものか及其応用を問ふ

唱歌

君が代 蝶々

此他各自の選に任せ一曲を課す^(注31)

これらを見る限り、楽譜を読むための基本的な知識と理論、現場で必要な唱歌を歌う能力といった、実践的な問題が課されていることが分かる。

IX. 学校教育の外の音楽状況

師範学校で行なわれていた音楽会は「一部の先進的な学校において実施されたに過ぎず、明治期においてはまだ一般に普及するには至らなかった」と言われている^(注32)。とはいえ、現存する資料から、師範学校内外の音楽活動について知ることは可能である。唱歌教育以外から西洋音楽が広がる経緯にはどのようなものがあつたのか、軍楽隊や、そのほか、民間で行われた活動に焦点をおいた調査から得られるものを次に考えてみたい。もちろん新聞記事等における西洋音楽の記録はきわめて断片的であり、明

治時代の富山では、芸妓や芝居、能楽、義太夫など、今日では日本の伝統音楽に数えられるジャンル、あるいは日清戦争勃発まで流行していた明清楽の演奏などの記録の方が目立つ。とはいえ、当時の多彩で混沌ともいえる状況の中から、西洋音楽に関連した記録を拾ってみることも可能である。ここでは当時発行された新聞に掲載された記事や、昭和11(1936)年にスバル文化会が発行した雑誌『スバル』に連載された、年表形式による「富山芸術文化史」、その他の資料にもとづいて調査したものを挙げていく。

まず廃藩置県直前の越中国では、明治3(1870)年、「常備大隊」が組織され、そこに喇叭手2名(伍長)、鼓手2名(伍長)、さらに小隊長ごとに喇叭手1名配属の記録がある^(注33)。小隊長は10名いたということになっているので喇叭手は合計12名となる。これによって富山県において西洋楽器が萌芽したと判断するのは早急だが、少なくとも信号喇叭と行進のための太鼓という西洋の楽器が持ち込まれたことは間違いない^(注34)。喇叭は、学校内行事において合図を行なうものとして使われており、明治22(1889)年の富山県師範学校における卒業式の式次第にも記されており、明治23(1890)年5月26日には、総曲輪尋常小学校において「月給3円50銭でラッパを吹ける使丁」を、新聞広告を使って募集している^(注35)。

信号喇叭ではなく、楽器を使った演奏会ということであれば、明治27(1894)年1月27日、富山市婦人協会に「実達教師」のヴァイオリンと佐伯とも子の琴の合奏が行われたという記録がある^(注36)。この演奏会がいったいどういった目的でなされたのかは不明であるが、この時期、富山で行なわれた演奏会には「慈善演奏会」と称されるものが多い。これは富山だけでなく全国的な流れで、学校関係の慈善演奏会の場合は、収益を学校の運営や校舎の建築にあてることもあった^(注37)。その後も明治34(1901)年5月10日、富山市総曲輪本派別院(現在の西別院)において婦人慈善会による西洋音楽会が行なわれている^(注38)。明治35(1902)年に入ると、8月5日に富山乾巽会と婦人協会共催による慈善音楽会が富山市歌舞伎座で行なわれている。「和楽、清楽」の他にオルガン独奏があった^(注39)。翌明治36(1903)年は4月28～29日の2日間、富山市婦人会主催による慈善演奏会が歌舞伎座にて行なわれている^(注40)。

ここでも「梅園流清楽楽友団の西洋音楽」と「和楽演奏」がなされたということで、音楽ジャンルの的には、かなり自由であったことが分かる。

富山県外から訪れた楽隊についての記録もある。明治29(1896)年6月7日、富山市北陸商業銀行が開業したとき、開業式の「祝宴」が開かれ、余興として東京から花火師や音楽隊を呼んだことが知られている。予告記事には「近頃の見物ならんと待ち掛け居るものおおしと聞く」と書かれていた^(注41)。訪れたのは東京市中音楽隊で、翌8日には富山市総曲輪小学校でも「奏楽」し、「職員生徒並に市川市長市吏員校下父兄も参聴」し、「音聴の美妙なる行雲流水をも停むるの想ありしといふ」と報じられた^(注42)。さらに高岡市の銀行・仲買たちが同楽隊を招き、10日には料理旅館木津楼にて数曲を演奏^(注43)、11日には同市片原町尋常高等小学校において《君が代》、《大日本愛国心》、《凱旋》、《皇御国》、《海国》、《金剛石》等を演奏している^(注44)。

このほか明治26(1893)年4月に起工した北陸鉄道が明治32(1899)年3月20日に開通したのを祝って、京都から楽隊が呼ばれている。たばこを販売していた京都の村井兄弟商会の「広告隊」で、当時の『北陸政論』の記事によると、「船橋今町には日本武尊(やまとたけるのみこと)の立物ありて人足を止めたるが殊に村井兄弟商会が広告隊を編成し市内を練り行きたるは唱采を得たり」と、当時の盛況ぶりを伝えている^(注45)。この村井兄弟商会は、当時「ヒーロー」という銘柄のたばこを主力商品にしており、同日の『北陸政論』にも、この商品名を大きく表示した「祝北陸鉄道全通」の広告が掲載している。なお鉄道開通の祝祭の雰囲気は、村井兄弟商会広告隊のほか、「東廓の祇園囃子、船橋新町の獅子舞」が演じられたことにも感じられ、また当日の式典では、正午「振鈴にて来賓入場し尋で一同着席するや『君が代』の奏楽あり了ると同時に芳川通相は一段高き演壇に上り祝辞を口演」したとか、あるいは式典の後に行なわれた食事の時間においても「奏楽数曲」があり「一同の心神を快にせしめ」という記録がある^(注46)。これらの奏楽を演奏した団体は記されていないが、式典の性格から考えて、村井兄弟商会の楽隊とは別であった可能性もあるだろう。

明治35(1902)年5月には、岐阜県の濃飛育兒院の少年音楽幻灯隊が富山を訪れ、当時の婦負郡八尾、杉原、上新川郡堀川、富山市、中新川郡滑川、

下新川郡三日市，入善，酒井にて，幻灯会を行なっている^(注47)。『富山日報』は，この音楽隊が「内外端唄，軍歌，唱歌等」を「一夜に十数回吹奏する」としているが，この「十数回」というのは曲数を指すのだとしても，かなりの曲数である。少年らは5月17日に東茂住より八尾に到着し，翌18日に専能寺にて音楽幻灯会を催し，23日の午後3時から，富山市の師範学校内雨天体操場において，やはり音楽会を開催している^(注48)。

富山でこのような民間の楽隊を作ろうという動きも明治34(1901)年に記録されている。富山市藤井町尋常小学校教員だった竹村眞助が「金沢市に於ける音楽隊と同様各地に演奏し報酬を得る目的の音楽隊」を組織しようとし，中田楽器店を通じて楽器を注文。6月に，それらが届いたという。同楽団はすでに同好者を集め，4月上旬に日枝神社拜殿を借りて練習を始めていた^(注49)。また明治37(1904)年8月以来，下新川郡泊町の有志が，陸軍一等軍楽手儀俄太郎を招いて軍楽隊を組織。学生に音楽を講習していたという記録もある^(注50)。

このほか，富山県内で行なわれた音楽会の記録を年代順に列挙してみると，まず明治39(1906)年1月には「有志婦人」が発起し，大門町浄園寺にて幻灯と音楽の会が催され，オルガンと月琴の独奏が行われている^(注51)。明治41(1908)年1月11日には愛国婦人会富山支部による年賀演奏会が富山市五番町光厳寺において開催され，オルガン独奏，ヴァイオリン独奏，合唱等があった^(注52)。同年と翌年には深敬保育園の「事業拡張」「事業達成の一助」のための慈善演奏会が行なわれている。まず明治41(1908)年12月22日，富山市福助座において3日間の演奏会が行なわれ，「ウィルギンソン夫人その他外国夫人の助演」を仰いでいる^(注53)。明治42(1909)年4月には，富山キリスト教婦人団体が「事業達成の一助」として演奏会を催し「富山在住の音楽家の援助を得」という^(注54)。いよいよ明治も終わりに近づいてくると，地元の音楽家による交流も可能になるほどの音楽人口になってきたのである。

X. 創作

ここまで富山県に西洋音楽が浸透していった過程を追ってきたが，その音楽活動は単に定められた唱歌集を歌ったり既製の作品を演奏するだけでなく，

新しい唱歌の創作や編集という動きもあった。その例は明治22(1889)年4月20日，富山県尋常師範学校卒業式において歌われた「同校音楽教師の作に係る卒業式の歌」である^(注55)。現代的な視点からすると，至極単純な和声にもとづいて考えられた旋律ではあるが，このように，オリジナル曲が楽譜(参考資料1)として印刷されたものとしては，富山県内で最も古いものの一つになるだろう。この歌の作詞・作曲者は明らかにされていないが，当該記述により音楽教員の作になるという。年代的には，作曲は野中武雄ということになる。

参考資料1：富山県師範学校の卒業式のために作られた唱歌

『私立富山県教育雑誌』第4号(明治22年4月)，47ページ。

また，やはり師範学校教師だった鷹野国蔵は『征清軍歌』を作っていて，これが「^{じゅうべいけんきん}恤兵献金」のために，富山市の中田書店より定価1銭で発売された^(注56)。

鷹野国蔵はこのほか『近世唱歌集』を編集し，明治28(1895)年，中田書店から出版された。地元新聞にも「唱歌を学ぶ者には便利なるものべし」と紹介されている^(注57)。時代精神を反映し，「忠君愛国の精神」を涵養するために唱歌の力が必要という立場から，国歌《君が代》を含め22曲を集めたもので，「唯一二の歌曲は欧米人の手」による旋律に新たな歌詞を付けたものだが，その他は「著者の手になれり」としている^(注58)。収録楽曲は以下の通り。

1. 君が代，
2. 一月一日
3. 紀元節

4. 天長節
5. 配所の月
6. 小松の操
7. 五月の雨
8. 武将の徳
9. 吉野の雪
10. 深夜の楽
11. 嵯峨野の月
12. 単騎遠征
13. 天祖の国
14. 武夫の心
15. 曝す屍
16. 日本男児
17. 暴風の浪
18. 教師の恩
19. 蛍雪の勉
20. 開校式
21. 贈位の祝祭
22. 祝卒業式^(注59)

このうち、少なくとも1作品は鷹野作でないことは突き止められている。《蛍雪の勉》というのがそれで、ドイツの *Der gute Kamerad* という、「出征した兵士が戦場で弾丸に倒れた戦友を歌った歌」に新しく徳育的な歌詞を付けたものであった^(注60)。

明治のおわりになると、学校の外においても、さまざまな主題による唱歌が流行となり、例えば明治40(1907)年には清明堂から『越中唱歌』が出版されている。富山県師範学校教師の杉江秀が作曲したこの唱歌はかなり人気があったらしく、同年10月10日に初版が発刊され、12月1日までに第6版を数えている^(注61)。音楽的には、旋律が明らかに当時流行していた《鉄道唱歌》をモデルにしており、付点音符による弾むようなリズムが特徴的である(参考資料2)。歌詞(参考資料3)は富山の風物を織り込みながら、国家主義的な色彩も併せ持っている。なお富山県立図書館所蔵の『越中唱歌』の奥付には広告があり、近刊として『六十九連隊唱歌』、『越中鉄道唱歌』、『郷土唱歌(富山)』の3つが発売予定

越 中 唱 歌

(つ ぶ く)

(ハ 調 二 拍 子)

快 活 = 杉 江 秀 作 曲

1 キタニー アラブルニ、ボンカイ
2 アンター ユーベニタテヤマノ

サンポーヌカキーレンザンノ
ケダカキミネチーフギテハ

アヒダチツツルカハガハノ
マシロキユキニーキヲキヨメ

1. 2 3. 3 | 6. 6 5. 5 | 3. 3 2. 2 | 1. 0 |
キヨキーナガレニウルホヒテ
ホクカイオドルーアラナミニ

2. 3 2. 3 | 2. 2 5. 5 | 1. 2 1. 2 | 3. 0 |
ハイヤーマヒロキチューエツノ
チチシキココロニタツツ

2. 2 5. 5 | 3. 2 1. 1 | 5. 1 2. 3 | 1. 0 |
ドーホーココニーハチジュマ
マレラハヒトトーソダチタリ

参考資料2：越中唱歌の楽譜

1. 北に荒ぶる日本海 三方高き連山の 間を綴る河々の 清き流にうるほひて 平野まひろき中越の 同胞ここに八十万	5. 我等が勉めはたすべく 広い野原にしげき山 清き流れと海とあり 天の与えし国なれば 力の限りつくしつづ 深き恵にそむかざれ
2. 朝夕に立山の けだかき峰を仰ぎては 真白き雪に気を浄め 北海眺る荒浪に 雄々しき心たぐひつづ 我等は人と育ちたり	6. 修養ここに怠らず 向上進取の気を存ちて 智仁勇の三つ共に 永く我等にあらしめば 誉れの冠とこしへに 我等が頭におかるべし
3. 戦国時代の昔より 我等祖先の勇敢は 歴史の上に記されぬ 彼の泰山けだかさは 我等子孫の血に萌て 此気は永く消えうせじ	7. 天災地異に気を挫く 弱者の末路は知られたり 人生五十そはなんぞ われらが胸にあふれたる 勇敢剛気の魂は かよわき声にみだされじ
4. 干戈をとれば内外に 立山隊の名も高く 平和になれば各がじじ 学の道に工業に 商業農にいそしみて 勉め励まん諸共に	8. 朝夕に立山の けだかき峰を仰ぎては 真白き雪に気を洗ひ あふるる流れむすびては 天の寵児われなりと 誰かは奮ひただざらん

参考資料3：越中唱歌の歌詞

とされている。県立図書館はこのいずれをも所蔵していないが、「富山芸術文化史」によると、『富山連隊唱歌』なるものがやはり清明堂（当該記述では福田清明堂）から発刊されており、作詞は高田浩雲、作曲は『越中唱歌』と同じ杉山秀だった^(注62)。

XI. 音楽研究

演奏や作曲ではなく、研究を主にした音楽受容の流れも少ないながら記録されている。明治35（1902）年12月14日、福井直秋（富山師範学校教諭、明治35〔1902〕年～36〔1903〕年）が富山市清水町の自宅に音楽研究会を設立し、「指導を開始」した^(注63)。この音楽研究会は、以下のような「規程」を設けていた。

- ・音楽を研究し普及を以て目的とす
- ・遠隔の地にあるものは通信会員と左の方法にて研究す
- ・毎月二回以上の曲譜送付、音楽論を配布
- ・音楽上の質問二件応答す^(注64)

3番目の規程にあるように、この研究会と称する集まりは、実際の楽曲を楽譜によって研究し、音楽論を勉強するとしている。また富山市の研究所に来られない会員については、楽譜や音楽論を通信教育によって学ぶことが計画されている。同年11月29日には、この富山音楽研究会の発会式が五番町光厳寺で行なわれ、発会式を兼ねて音楽演奏会も開催されている。この音楽会においては「富山音楽団にても雅楽部、軍楽部」が賛助出演したとされているが^(注65)、この富山音楽団というものがそもそもどんな団体で、音楽研究会とどのように関係しているのか、どういうメンバーが何を演奏しているかについては一切不明である。ただ明確なのは、この富山音楽研究会の「主幹」が福井直秋であったということだけである。なお同年10月には「西洋音楽の普及と研究を目的」とした石川県音楽研究会が発足し、石川県師範学校内に事務所が置かれたが、同時期に2つの県で「音楽研究会」が誕生したことになる^(注66)。

この手の音楽研究会なる組織については、大正時代に「富山音楽研究会」なる組織が存在したことが明らかになっているが、この会は定期演奏会を春秋2回開き、藤原義江を招聘した実績がある。明治時代に福井が設立したものと同一かどうかは不明だが、大正期の研究会の創設者は福井直秋ではなく、本多源馬であるという記述が残っている^(注67)。

音楽を調査研究する動きとしては、厳密に西洋音楽の範疇には入らない可能性があるものの、明治39（1906）年に富山教育会が、俚謡・童謡の調査を行なっている^(注68)。この「俚謡・童謡」の中身は、時代的に考えれば民謡とわらべうたに相当するものと推測できるが、それでも地方に残る音楽遺産が調査され始めていたということは注目すべきだろう。

XII. まとめ

本論文では、現存する資料から得られる富山の西洋音楽受容を探った。明治16（1880）年、富山県が

現在の形になり、小学教則や中学校規則が制定された。しかし唱歌教育を通して西洋音楽を普及する態勢が整っていなかったため、国学者でもあった野中武雄が東京の音楽取調掛に学び、彼が明治18(1882)年に、富山師範学校に着任してから、富山県内における本格的な西洋音楽受容が、唱歌教育とともに始まった。野中の主導のもと、音楽会や唱歌を学ぶ会が開催されるようになり、その後も師範学校の教師や、教員養成教育を受けた学校教師が地域に増え、西洋音楽の普及に貢献していった。唱歌講習会や音楽研究会の発足が、その象徴といえるだろう。

一方、一般社会における西洋音楽の普及は、まだそれほど広範囲なものではなかった。とはいえ明治27(1894)年以降の記録は残っており、ヴァイオリンなどの西洋楽器、軍楽隊などが普及するようになったことが分かる。慈善活動としての演奏会を開こうという先駆的試み、式典にあわせた楽隊の演奏、富山に来県した楽隊に触発されて自前で楽隊を作ろうという動きもあった。明治40(1907)年には教育目的ではなく、一般の人々が愛好する《越中唱歌》が作曲され流行するまでに至った。これらの動きが、大正時代における音楽文化へとつながっていったのである。

本論文では、日本の伝統音楽がどのように扱われたかについて述べてこなかった。しかし富山県立図書館にマイクロフィルムの形で保存されている明治時代の新聞を大雑把に眺めただけでも、浄瑠璃や琵琶楽など、伝統音楽は明治時代を通して幅広く演奏されたことが分かる。今後は、それらとの関係を含めた富山県における音楽嗜好の変化と動向に着目した調査研究も必要となってくるだろう。

注

- (注1) 富山の西洋音楽受容を、この形で包括的に記述したものには、竹中祐博「音楽」『昭和のアルバム：富山の文化往来』富山新聞社、1989年、101-132ページがある。
- (注2) 富山教育学窓会『母校九十年の歩み-富山県教育のうつりかわり-』富山県教育学窓会、1963年、3ページ。
- (注3) 同資料、3ページ。
- (注4) 「富山県中学校開校布達、同中学校規則：明治十七年六月三十日」富山県編『富山県史、史料

編VI』近代上、富山県、1983年、1362ページに引用。

- (注5) 堀内敬三『明治音楽百年史』音楽之友社、1968年、34ページ。
- (注6) 「音監往復書類」(明治17年)山住正己『唱歌教育成立過程の研究』東京大学出版会、1967年、173ページに引用。
- (注7) この段落の野中武雄の情報については、以下の文献を参照した：富山市史編集委員会『富山市史』第2巻、富山市役所、1960年、123ページ；「野中武雄」『大人名事典』平凡社、1954年、125ページ；「野中武雄」『講談社 日本人名大辞典』講談社、2001年、1470ページ；『デジタル版 日本人名辞典+Plus』講談社、
<<http://kotobank.jp/dictionary/nihonjinmei/>>, Viewed on 15 April 2010。
- (注8) 「東京通信：洋琴特別習学」『中越新聞』明治18年10月20日、第3面。なお音楽取調掛は明治18年2月に音楽取調所と一度改称され、同12月、再び音楽取調掛と再改称された。
- (注9) 「金沢通信：唱歌演習」『中越新聞』明治19年4月27日、第2面；田甫桂三編著『近代日本音楽教育史I』学文社、1980年、58～59ページ。
- (注10) 『富山県学事通報』第8号(明治29年4月)、26-27ページ。
- (注11) 同資料、27ページ。
- (注12) 富山県教育学窓会『母校創立百周年記念誌』富山教育学窓会、1937年、39～40ページ。
- (注13) 富山県教育史編さん委員会『富山県教育史』上巻、富山県教育委員会、1971年、428ページ。
- (注14) 小竹文太郎編『富山県師範学校 創校満四十年記念雑誌』大正3年、63ページ。
- (注15) 前掲『母校創立百周年記念誌』、39ページ。
- (注16) 「学理講究会並に唱歌演習会」『中越新聞』明治20年3月10日、第2面。
- (注17) 『富山県学事通報』第12号(明治20年8月)、14ページ。
- (注18) 前掲資料、14ページ。
- (注19) 「富山県音楽の景況」『音楽雑誌』第25号(明治25年10月)、31ページ。
- (注20) 同資料、31ページ。
- (注21) 同資料、31ページ。
- (注22) スバル文化会編「富山芸術文化史」『スバル』第7号(第2巻第1号)、1939年1月、35

- ページ。
- (注23) 同資料, 36ページ。
- (注24) 同資料, 36ページ。
- (注25) 「富山県講習会」『音楽雑誌』第47号(明治27年4月), 33ページ。なお明治27(1894)年10月12日には富山師範学校内でも唱歌講習会が行なわれている。スバル文化会編「富山芸術文化史(其の二)」『スバル』第8号(第2巻第2号), 1939年3月, 23ページ。
- (注26) 前掲「富山芸術文化史(其の二)」, 24ページ。
- (注27) 唱歌教育における楽器については田甫桂三『近代日本音楽教育史Ⅱ』学文社, 1980年, 110~113ページを参照。
- (注28) 「風琴の寄付」『北陸政論』明治29年5月12日, 第2面。なお別の資料によると, これは学校の教職員が父兄に呼びかけ, 2月13日購入してもらったことになっている。八尾正治, 本間直二, 山岸曙光『総曲輪懐古館』巧玄出版, 1977年, 53~54ページ。
- (注29) スバル文化会編「富山芸術文化史(其の四)」『スバル』第10号(第2巻第4号), 1939年7月, 17ページ。
- (注30) スバル文化会編「富山芸術文化史(其の五)」『スバル』第11号(第2巻第5号), 1939年9月, 13ページ。
- (注31) 「尋常小学校本科正教員試験問題」『私立富山県教育会雑誌』第6号(明治25年7月), 14ページ。
- (注32) 前掲『富山県教育史』, 428ページ。
- (注33) 前掲『富山市史』第1巻, 927ページ。
- (注34) 同資料, 927ページ。
- (注35) 前掲『総曲輪懐古館』, 53ページ。
- (注36) 前掲「富山芸術文化史(其の二)」, 21ページ。
- (注37) 詳細は前掲『近代日本音楽教育史Ⅱ』, 228~230ページ。
- (注38) スバル文化会編「富山芸術文化史(其の七)」『スバル』第13号(第3巻第1号)1940年1月, 38ページ。
- (注39) スバル文化会編「富山芸術文化史(其の八)」『スバル』第14号(第3巻第2号)1940年4月, 17ページ。
- (注40) スバル文化会編「富山芸術文化史(其の十)」『スバル』第16号(第3巻第4号)1940年8月, 17ページ。
- (注41) 「商業銀行開業式の余興」『北陸政論』明治29年6月6日, 第3面。
- (注42) 「小学校と音楽隊」『北陸政論』明治29年6月9日, 第3面。
- (注43) 「音楽隊の演奏」『北陸政論』明治29年6月12日, 第2面; 「市中音楽隊」『富山日報』明治29年6月12年, 第2面。
- (注44) 「音楽隊の演奏」『北陸政論』6月13日, 第2面; 前掲「富山芸術文化史(其の四)」, 17ページ。
- (注45) 「北陸鉄道開通式」『北陸政論』明治32年3月21日, 第2面。
- (注46) 同資料, 第2面。
- (注47) 幻灯は, 現在でいうスライドに相当する。
- (注48) 「濃飛育児院幻灯会」『富山日報』明治35年5月14日, 第2面; 「八尾町の音楽幻灯会」『富山日報』明治35年5月18日, 第3面; 「八尾だより(十八日)」『富山日報』, 明治35年5月21日, 第3面。
- (注49) 前掲「富山芸術文化史(其の七)」, 39ページ。
- (注50) スバル文化会編「富山芸術文化史(其の十一)」『スバル』第17号(第3巻第5号)1940年10月, 34ページ。
- (注51) 同資料, 34ページ。
- (注52) スバル文化会編, 「富山芸術文化史(其の十六)」『スバル』第22号(第4巻第4号)1941年9月, 19ページ。
- (注53) スバル文化会編, 「富山芸術文化史(其の十八)」『スバル』第5巻第3号(1942年5月), 17ページ。
- (注54) 同資料, 17ページ。
- (注55) 『私立富山県教育雑誌』第4号(明治22年4月), 47ページ。
- (注56) 「征清軍歌」『音楽雑誌』第47号(明治27年9月), 3ページ。なお詳細は未だ不明ながら, 鷹野はこの歌を使った授業を師範学校で行っており, これが富山県を視察中だった寺田文部参与官の目に留まり, 楽譜を持ち帰ったというエピソードも残っている。前掲「富山芸術文化史(其の二)」, 23ページ。
- (注57) 「近世唱歌集」『富山日報』明治28年4月

12日, 第3面。

(注58) 鷹野国蔵「自叙」『近世唱歌集』富山：中田書店, 明治28年, ページ番号なし。なお同唱歌集は, 国会図書館の近代デジタルライブラリーにて閲覧可能である。

<http://kindai.ndl.go.jp/BIBibDetail.php?tpl_wid=WBPL110&tpl_wish_page_no=1&tpl_select_row_no=1&tpl_hit_num=1&tpl_bef_keyword=&tpl_action=&tpl_search_kind=1&tpl_keyword=&tpl_s_title=&tpl_s_title_mode=BI&tpl_s_title_oper=AND&tpl_s_author=&tpl_s_author_mode=BI&tpl_s_author_oper=AND&tpl_s_published_place=&tpl_s_published_place_mode=ZI&tpl_s_published_place_oper=AND&tpl_s_publisher=&tpl_s_publisher_mode=ZI&tpl_s_publisher_oper=AND&tpl_s_nengou=AD&tpl_s_published_year_from=&tpl_s_published_year_to=&tpl_s_ndc=&tpl_s_ndc_mode=ZI&tpl_s_heading=&tpl_s_heading_mode=ZI&tpl_s_heading_oper=AND&tpl_s_toc=&tpl_s_toc_oper=AND&tpl_item_oper=AND&tpl_sort_key=TITLE&tpl_sort_order=ASC&tpl_list_num=20&tpl_s_jp_num=40073232>

(注59) 同資料, 目次, ページ番号なし。

(注60) 前掲『近代日本音楽教育史II』, 311~312ページ。

(注61) 清明堂楽器部作詞, 杉江秀作曲『越中唱歌』富山：清明堂書店, 明治40年(初版出版), このデータに関しては, 富山県立図書館所蔵の第6版の奥付を参照した。

(注62) スバル文化会編「富山芸術文化史(其の十七)」『スバル』第23号(第4巻第5号)1941年10月, 17ページ。

(注63) スバル文化会編「富山芸術文化史(其の九)」『スバル』第15号(第3巻第3号)1940年6月, 17ページ。

(注64) 同資料, 17ページ。

(注65) 前掲「富山芸術文化史(其の十)」, 64ページ。

(注66) 坂本麻実子「石川県人の西洋音楽事始め(4. 日本をめぐる論考, 徳丸吉彦先生古希記念論文集)」『お茶の水音楽論集』特別号, <<http://hdl.handle.net/10083/4688>>, 351ページ。

ジ。

(注67) 『ビジュアル富山百科』富山新聞社, 1994年, 394ページ。

(注68) スバル文化会編「富山芸術文化史(其の十四)」『スバル』第20号(第4巻第2号)1941年5月, 26ページ。

(2010年5月20日受付)

(2010年7月14日受理)

